【エッセイ】

一語の時代
――言語時評・廿――

工藤力男

うつりゆくこそことばなれど

「うつりゆくこそことばなれ」――これは、ルーマニアの言語学者、エウジェニオ＝コセリウの著書“synchlonie, diachlonie, histoire”に、亀井孝・田中克彦両氏が与えた邦訳名である。

ことばは常に変化してとどまることがないが、人の命はせいぜい百年。そのあいだに生まれあるいは変わったことばに対して、人はいろいろな感想をいだく。自分の言語習得期以前から使われていることばは、そういうものだと思ってすごす。だが、言語を習得してから変化したことばには、当然のこと違和感を覚える。そして、意図的ならぬ言語変化のほとんどは誤用に始まる。この違和感の癒しがたい最大の原因がここにある。

昭和三十年代、経済の高度成長期、男たちはがむしゃらにはたらいた。その時期の会社人間を「モーレツ社員」と称することもあった。彼らは、帰宅すると「ふろ、めし、寝る」ということばしか発しないと言われた。「三語の時代」である。時は移り、いま低成長の時代、男たちの、そして日本人のことばはどうなっているだろうか。

ダイジョーブ

三年前の三月、東海道新幹線の車内でのこと、車掌がや

って来て「乗車券はダイジョーブですか」と言った。乗車券を落としでもしたのかと思ってポケットを探ってそれを見せると、車掌は引き取って検札印を押した。その「ダイジョーブですか」は、「拝見したい」の意味なのであった。

某大学の博物館の入り口では、「お荷物、ダイジョーブですか」と尋ねられた。我が肩掛けカバンの吊り紐は確かにくたびれているが、切れるほどではないので手で叩いて見せると、受付嬢は「後ろにロッカーがあります」とわたしの背後を指さした。その「ダイジョーブですか」は、「ロッカーに預けることができます」の意味らしかった。

近くの便宜店（コンビニエンスストア）でヨーグルトを買うと「スプーンはダイジョーブですか」、別の日には新聞一部に対して「袋はダイジョーブですか」と問われる。この「ダイジョーブ」は要るか否かの意味らしい。せめて「御不要ですか」くらいは言ってもらいたいものだ。無論、若い店員は雇い主である会社が作った接客マニュアルに従っているにすぎないだろうが。

ラジオ第一放送の「土曜楽市」で、みえを張って失敗した経験談の募集に応じた投書をいくつか読みあげたとき(2008.2.16)、中に「電話大丈夫です」と書かれた主婦のはがきがあり、スタジオから投稿者に電話をかけて話を聞いた。このばあいの大丈夫は、「スタジオから電話をかけてよこしてもさしつかえない」の意味だったようである。

わたしは脚腰の痛みのために整形外科に通院して長いのだが、そこでは、按摩の強さについても、牽引のベルトの締めぐあいについても、低周波の吸盤に流す電流の強さについても、きまってダイジョーブかと聞かれる。

一月末、次年度から自分のゼミナールに所属する二年生を呼んで、いろいろ訓戒を垂れ、春休みに読むべき本のことなどを話した。そして「何か質問はないか」と言うと、「ダイジョーブです」が返ってきた。そこで、自分は今そのダイジョーブについて考えているのだが、諸君にはなんでもダイジョーブの一語で済ます傾向がありはしないか、と問うと、確かにそうだと答えた。「せめて、ありません、と言ってほしい。欲を言えば、ございませんだ」と言って帰らせた。

なんでも商品

「金融商品」という語に接して驚いたのは二年ほど前のことである。だが、これは自分の迂闊さのせいで、「金融

商品の販売に関する法律」がその六年前に成立していたのであった。この法律によって、「保険商品」「ローン商品」が用いられることになった。売る方にとっては確かに便利であろうが、買わされるこちらは当惑するばかりである。俄か勉強でその法律を読もうとしたが、あまりの膨大さに驚いて諦めた。それでも、商品取引所法、保険業法、信託業法など、金融・利殖・保障など、十五もの法律に及ぶ広範なものだということは理解できた。

ＪＴＢ（変な社名！）のホームページには、「旅行商品」に始まり、「この商品」「商品詳細」「ご希望の商品」「商品情報」「売れ筋」など、「商品」とその周辺の用語が溢れている。Yahoo！トラベルでは「宿泊プラン」の称を用いるが、他社はどうなのだろうか。なんでも「商品」と言うのは少し無神経すぎはしないか。簡易保険の宿泊施設「かんぽの宿」を利用したことがあるので、全国の「かんぽの宿」から各種商品の広告がしょっちゅう届く。割安の料金で泊まれるというのである。それには当然のように「販売期間」が設定してある。彼らにとっては宿泊も商品。「提供」や「取り扱い」ならぬ「販売」だという論理なのだろう。

ラジオ第一放送のＮＨＫジャーナルでもさまざまの新商品を知ることができた。この時評・十七の末尾に書いた、羽田と上海虹橋間の航空路線を、航空会社の一社員は「利便性の高い商品」と語った（2007.6.25）。ガソリン価格の高騰で高速道路の利用が減っていることに対して運営会社が考えた方策の一つは、どこで乗り降りしても料金がかわらない「商品を発売する」ことであった（2008.7.26）。内橋克人さんは、「介護の商品化」という表現で介護業界の実態を批判した（2007.6.21）。外国語学校のＮＯＶＡ倒産のニュースに、「売り上げが大幅に落ち込んだ」という表現があった（2007.10.26）。学校と名がつけば教育施設と思いたいが、その教育も商品化したのだろう。人間の臓器さえ移植のための商品になる時代なのだから、教育の商品化くらいで驚いてはなるまい。

世界労働機関がフィラデルフィア宣言で「労働は商品ではない」を掲げて六十年余り。その宣言の方向とは反対に、何もかも商品化していく時代である。あるインターネット成金が、カネで買えないものはないと豪語して話題になった。彼にとっては愛情も商品なのだろう。なんでも商品の時代にふさわしい発言であった。

コメント

良貨を駆逐する悪貨のように、片仮名語（これを「カタカナ語」と書くのも共犯）がいよいよ氾濫する。これに対して国立国語研究所がようやく重い腰を上げた。この提案とても、報道機関が積極的に使わなければ画餅におわるだろう。やたらに長い語形の、エンターテインメント、プレゼンテーション、メタボリックシンドロームなどは、三四拍に短縮して使われるようになったが、いかにも軽薄な感じだ。ニーズ、メリット、デリバリーなどは、それぞれ場面に応じて、要求・希望、長所・利点、配達などと簡単に言い換えられるのだから、わたしは、できれば使わずに一生を終えたい語である。

「トラブル」もなるべく使わずに済ませたい語なのだが、最近、若い韓国人研究者、金愛蘭さんの論文「外来語『トラブル』の基本語化」（日本語学会『日本語の研究』第二巻二号2006.4）に目を覚まさせられた。前世紀の中ごろから終わりまでの毎日新聞の記事を調べて、意味・用法が三種六類に拡大し、新聞で報道される機会の多い、〈深刻・危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常な事態〉を広く概略的に表わすことのできる語として成立した、というのである。確かな論証である。

「コメント」も日本語に定着しやすい長さの四拍語なので濫用される。何か事件が起こると、放送局のスタジオにコメンテイターと称する人々の並ぶことがある。あのばあいのコメントは何なのだろう。論評・解説では重すぎ、感想では軽すぎるというのか。質問に対する回答にすぎないこともある。わたしが大学の教育学部に勤務していたころ、教育研究集会などに招かれることがあった。出席すると少し高い所の「助言者」と書いた席を与えられて面映ゆかった。今はコメンテイターと書いてあるのだろうか。

右のようなばあいはまだいい。近ごろ、殺人事件の報道で「コメント」に接する機会が数回あった。愛知県安城市で刺殺された一歳児の通夜と葬儀について、ラジオ第一放送のニュースは「父親が、死刑になっても許されない、とコメントした」と報じた（2005.2.6十九時）。これを報じた翌日の朝刊の表現は、「と声を震わせた」（朝日）、「と話した」（讀賣・毎日）であった。

奈良市の小学校生の誘拐殺人事件で、容疑者が追起訴されたことを告げるラジオのニュースでは、父親が「このよ

うにコメントしています」と報じた（2005.2.9）。奈良県警を介して発表したそれを、翌朝の新聞は「談話を発表した」（朝日）、「コメントを公表した」（毎日）と書いた。その裁判で死刑が確定した日のラジオは、「心情を綴ったコメントを発表した」であった（2007.10.11）。コメントは口頭・書面をとわず、談話は口頭によると思うのだが、右のように、書面でなされても「談話」と書く新聞もある。ライブドア事件控訴審の判決結果に対する検察側の見解を、第一放送七時のニュースは「談話」、インターネット（イザβ版）は「コメント」とした（2008.7.25）。

アフガニスタンで非政府組織の日本人が拉致された事件は痛ましかった。遺体が確認された深夜、家族にそれが伝えられた。翌朝の新聞が一斉に報じたものを読むと、報道機関の代表による電話取材である。父親の感想を書いて、「と話した」（朝日）、「とコメントだけ出した」（産經）、「と苦しい胸の内を明かした」（東京）、「とのコメントを発表した」（毎日）、「と声を振り絞った」（讀賣）とあった。取材経過を知らずに読むと、その感想が語られた経緯は判断できない。

確かに「コメント」は便利な言葉である。しかし、時により状況により使い分けてよい、とわたしは考える。あまり感情的になっては困るが、直話のばあいは表情も語気も伴うのだから、怒り、喜び、悲しみなどとあってもいい。謝罪する、反省する、嘆くなどの動詞も使える。なんでもコメントで済ませるのは怠惰ではなかろうか。

概して放送は「コメント」が好きである。七月に秋葉原で起こった通り魔による殺傷事件の遺族の感想を伝える際もそうであった。大分県の教員採用試験をめぐる瀆職事件の公判が始まった九月四日、被告の一人が弁護士を介して文書で謝罪した。「ニュースセブン」は、その文書を画面に映して音声・字幕とも「コメント」と表現した。輸入事故米の偽装事件について、九月十四日夜七時のラジオのニュースは、当の会社の社長が「文書でコメントを発表した」と報じた。

インターネット文体

わたしがよく目にする電光ニュースは新幹線の車内のものである。そこには特異な表現がいろいろ目につく。たちまち流れていくので正確には再現しえないが、例えば「某国政府はかねて懸案のなんとか問題について検討し、なん

とかの方針を固めた。某報道官が語った。」のようなものである。このたぐいを見ると、どうにも落ちつかない。わたしの教わった文章の手順と違うからである。

ニュースの文章は、一般には十分な推敲を経てから公にするはずである。電光ニュースも同じ手順を経ているはずだが、せいぜい六十字ほどに収めるためか、いったん文を結び、申しわけのように補足する。報告者や日時などが二次的な要素として附加されるのである。私はこれを「電光ニュース文体」と称したい。

読者諸氏はもうお気づきかと思うが、右に示した文体が大流行している、インターネット世界で。実例として短いものを選んで掲げる。出所は「YAHOO! JAPANニュース」、原文は横組み、太字部分は見出しである。

〈米大統領選〉ラルフ・ネーダー氏が出馬声明【ワシントン及川正也】米消費者問題活動家のラルフ・ネーダー氏（73）は24日、11月の米大統領選に出馬すると表明した。NBCテレビで明らかにした。主要政党に属さない「第3の候補」として立候補する。（毎日新聞配信2007.2.25）

本文一つに補足文が二つ。従来の新聞なら、この二つは若干辞句を整えて、本文中の「24日」と「11月」の間に置き、一文中に収めたものである。次も同様である。

〈福田首相〉アフガンの民生支援、状況の変化に対応　福田首相は26日の衆院テロ防止・イラク支援特別委員会で、アフガニスタン本土での民生支援について「他国と協力してできるところはあるのか、常に模索しなければいけない」と述べ、状況への変化に応じ検討していく考えを明らかにした。西村康稔氏（自民）の質問に答えた。（毎日新聞配信2007.10.26）

この補足文は、「民生支援について」に続けて記すのが一般であった。

補足記事は、時には本文よりも大事な情報のこともある。いな、大事だからこそ、長い本文に埋もれないように、あえて附けたしの形で書くこともあるのである。映画やテレビのドラマでは、コロンボ警部や古畑任三郎が、睨んだ被疑者の部屋を出るときに振り向きざまに問いかけるあれである。ところが、インターネットのニュースはそうではない。

オバマ氏と正副コンビも　クリントン氏が示唆　米大統領選の民主党候補氏名を争っているヒラリー・クリ

ントン上院議員は、オハイオ州予備選などでオバマ上院議員に勝利して一夜が明けた5日、米CBSテレビの番組に出演し、オバマ氏とコンビを組んで同党の正副大統領候補となる可能性を示唆した。AP通信が伝えた。(2008.3.6共同)

かかるニュース源は、見出しの次に括弧書きするだけでよかったものである。

報道媒体が違えば文体も違って当然である。字数の少ない携帯電話画面で用をたすことに慣れた人たちは、インターネットのニュースにも短さを求めるのだろうか。配信側もそれを心得て短く書くが、やはり何か足りないように感じて補足するのだろうか。長めの本文へのぶらさがり文であるが、新聞にもこれが波及している。わたしが気づいた早いものは六年前の朝日新聞の記事(2002.2.10)である。見出しを省いて掲げる。

【カイロ9日=村上宏一】米国がイラクのサダム・フセイン政権を転覆させる構えを見せているのに対し、イラクのクルド人を代表するクルド民主党(KDP)とクルド愛国同盟(PUK)のバルザニ、タラバニ両議長は8日、「サダム後」が不確かなままで現体制を倒すことに、強い懸念を表明した。トルコのテレビ番組で語った。

これで一つの段落である。冒頭百二十四字の一文に、十三字の一文がぶらさがっている。

その意図がよくわからない例もある。「「余地ある国、財政出動を」IMF専務理事」の見出しをもつ記事(2008.1.27)の冒頭部分である。

【ダボス(スイス東部)=青田秀樹】国際通貨基金(IMF)のストロスカーン専務理事は26日、サブプライム危機による世界経済の減速懸念に対して「財政上の余地がある国ならば、財政刺激の用意をすべきだ」と述べた。5年連続で2ケタ成長を遂げながら、国内消費が「力不足」とされる中国などを念頭に置いているとみられる。

ダボス会議で発言した。

最後の文は第二段落の第一文で、さらに百四十余字が続くのだが、どうしてここから別の段落になるのだろう。

新聞記事をもうひとつ、「最古級の荘園絵図　東大寺流出の1点発見」の冒頭である(2008.5.25)。

東大寺(奈良市)が奈良時代中期に所有した荘園の

利用状況を描いた絵図（麻布製）が見つかった。奈良国立博物館が24日、発表した。

冒頭の一文も短いので、あえてこの形にする必要はなかったと思う。

かくて、電光ニュース文体すなわちインターネット文体すなわち新聞記事文体になるに違いない。

一語の時代

インターネットが普及した今の世界は、大宅壮一さんが健在だったら、「一億総発信者」とでも呼ぶに違いない時代である。

情報の発信には分秒を争うことがあるらしく、発信者は、ことばを選び、表現を練ることを怠ることになるのだろう。そこで、なんでも一語で間に合わせようとする。対応に窮すると必ず「頭の中が真っ白」になり、尊敬も謙譲も「いただく」で済ませ、「発足する」も「結成する」も「組織化する」も非文「立ち上げる」でかたづける。

かかる時代だからこそ、感想や意見を発信するには、最も適切なことばを探らなくてはならないはずである。しかるに、この国では、英語の学習には時間をかけるが、母語の教育に力を注ぐことは怠った。だが、英語力は予期したようには伸びず、片仮名英語ばかりが氾濫している。期待は裏を掻かれたのである。

今こそわたしたちは、母語をいつくしむ心を育て、日本語の力の恢復に努めなくてはならない。

（二千八年秋　完）